



発行
 中央大学学会
 名古屋支部
<http://www.gakuinkai.com/nagoya/>
 編集責任者
 広報委員長
 山川 利治

白門なごや第 37 号	
スペシャルインタビュー 名古屋高等裁判所 綿引万里子長官	P 1～4
エッセイ 中大での学生生活 「ゆとり世代」から「働き方改革第一世代」へ 中央大学での思い出と現在の私 私の挑戦 「出会い」そして「別れ」	P 5～12
なぜ走るか。マラソン編 行政書士という仕事 山ガール	P 13～19
活動報告 120周年記念家族会、青年部会、父母連絡会愛知県支部、 中央大学出身力士を励ます会、ご縁を大切に、 学員体育会中部懇話会、俳句同好会	P 20
支部長就任あいさつ	P 21
幹事長就任挨拶 第121回総会・講演会・懇親会開催報告	P 21～22

プロフィール
 東京都出身 昭和55年判事補任官 東京、岐阜、大阪等の裁判所勤務
 最高裁判所調査官 昭和三十九年判事補任官 東京地裁部総括 司法研修所教官 東京高裁判事
 最高裁判所調査官 東京地裁部総括 司法研修所教官 東京高裁判事
 最高裁判所調査官 宇都宮地裁所長 横浜家裁所長、東京高裁判部総括等
 を歴任 札幌高裁判官を経て平成30年9月から名古屋高等裁判所長官



スペシャルインタビュー
 名古屋高等裁判所 綿引 万里子 長官(昭53卒)
 中央大学志望の動機や大学時代の思い出、裁判官を目指された理由や印象に残る事件、ご苦労されたことなどを語っていただきました。
 聞き手 植村 優香(平29卒)、写真 安井 慎(平17卒)
 構成 山川 利治(昭49卒)
 (令和2年2月6日(木)名古屋高等裁判所にて)

■中央大学を志望された理由やきっかけは何でしょうか。
 中央大学を目指したのはまさに法曹を目指したからです。私は幼稚園から中学まで日本女子大付属の女子校で育っていました。医者である父はお医者さんのお嫁さんにしたかったようなのですけれど、それでは何となく人生が物足りないような気がして、高校は国立の男女共学校を受験しました。その頃はまだ女性が社会で活躍するにはハードルが高かった時代で、国家試験に受かるのが社会で活躍するための早道のように思えました。父が医者でしたからまず医学部の受験を考えましたが、理数系が苦手、しかも、父は女医さんの苦労を身近で見ていて、医者になるのは大反対でした。そうなると思いつくのは司法試験です。ちょうど大学受験のことを考えている時に、産んだばかりの子供をロッカーに遺棄した女性が社会的にすごく叩かれた育児殺事件というのがあり、母親をここまで追い詰めた父親もいるはずなのになぜ母親だけが責められるのか、そうした女性の視点から弁護士になつてみたいなと思いい、法科の中央を目指しました。

■中央大学に入ってまずどんなこと

を感じられましたか。

司法試験を受けようと思って大学に入ったので、どこか学研連の研究室に入室しようと考え、真実の法会という名前にひかれて真法会に入りました。中央大学の思い出は真法会での思い出が9割以上と言ってもいいかもしれないですね。そこでの友達との関係とか、みんなで議論したりとかいった時間が圧倒的に長かった気がします。

■4年間の大学生活はどんな毎日でしたか。

特に2年の秋ころからは、朝8時からいに真法会の研究室へ行き、夕方6時くらいまで籠もりつきりで勉強していました。両側に衝立のある机で、ゲートに入れられた競馬馬のようで、こんな生活は堪らない、早く終わらせようという思いで頑張りました。授業は面白いなと思ったものは出ました。山田卓生先生の民法の授業とか渥美東洋先生のゼミです。渥美ゼミは当時中大で一番厳しいゼミといわれていて、先生と議論するとみんなコテンパンにやられて黙ってしまふんですが、黙るもんかと食らいついて議論していくのが楽しくて。渥美先生と議論をさせてもらったのが私の議論好きの出発点かもしれ

れませんね。渥美先生は本当に恩師だと思っています。司法試験に合格した時、渥美先生から「これから裁判官になるんだつたらしいんな判断をするでしょうが、その判断がどういう社会をつくることになるのかいとも考えなさい」と言われたことが耳に残っています。裁判官となって仕事をしていく上での指針となったなあと思います。

■司法試験という、一人でこつこつやるようなイメージもあったのですが、どちらかという仲間とも一緒にという感じでしょうか。

一人でこつこつ本を読む時間は大事だけれど、人と議論することはとても大事なことでと思っています。それができた環境が真法会で、真法会には感謝ですね。

水道橋の校舎には学研連という司法試験受験のための研究室が大小様々入っていて、この中で真法会が一番の老舗でした。「受験新報」も出していましたし、塾全盛になる前は真法会だけが答案練習会をやっていた、司法試験合格者500人のうち他大学からも含め300人以上がこの答案練習会に参加していたという時代でした。真法会では勉強が進んだ人がゼミ長といった立場になる、

合格して司法修習生になるとそうした人がゼミ長になって来て、若い人を教えてあげるといふサイクルがきちつとできていました。

私は水道橋校舎最後の卒業生・合格者で、司法試験の合格発表の時は玄関に学研連各会が合格者名を貼り出して、今年は〇〇会が良かったねとか話をする、そうした最後の年でしたね。

■司法試験の受験勉強で辛くなった事もあったのではと思いますが、そんな時はどうされましたか。

勿論ありました。そうしたときは、同期の仲間を誘って坂の下にあるモンシエリという喫茶店にコーヒードrinkに行ったり。そのこのモンブランが好きでした。また、司法試験に合格して修習生になると、先輩が水道橋駅近くのトンカツ屋のかつ吉で奢ってくれますよ、高級ヒレカツを。合格したらこういうご身分になれるのだという、ちよつとした憧れでした。思い出の場所でもありますね。

■法曹の中で裁判官を選んだ理由を教えてくださいませんか。

弁護士になろうと司法試験の勉強をしていたのですが、修習生時代に素敵な裁判官と出会ったというのが

一つと、裁判官は思考において自由だと強く感じたということが裁判官を選んだ理由です。弁護士は依頼者の意向や言い分を、それは無理だよと思っても、こう言ってくれといわれたらそう言わざるを得ない部分があることを修習時代に感じました。また、検察庁というのは上命下服の組織のように感じました。起訴、不起訴も自分一人では決められない、判決を貰わないと先に決めない。それに比べると裁判官は3人の合議で裁判を進めるときも、若い人がちゃんと1票を持って裁判長にしっかりとモノを言っていて、自分がこの紛争を解決するのに一番良いと思うところに向かつて雑念無くやって行けるのは何て素敵なんだろうと。それで裁判官は本当に自由だと思って任官を決めました。弁護士はこう解決したいと思っても、最後の決定権が無いという辛さがあるのも幾つかの事件で見たので、「決める」というのは辛いだけけれど、裁判官は決めることができる力を持っているということにも魅力を感じたのかもしれないですね。

■裁判官になられて、印象に残るお仕事とか出来事などお聞かせください。



綿引長官を囲んで塩見支部長（左端）と広報委員

一杯ありませんが、一
つは最高裁判所の調査官時代に担当
した事件です。日本で生まれた子供
が、日本国籍の確認を求めた事件で
す。日本に入国したフィリピン人と
思われる女性が子供を産んでその後
失踪してしまつた。この赤ちゃんを
養子にしたアメリカ人の神父さんが
この子供の国籍確認をフィリピン政
府に求めたのですが、母親が確かに
そのフィリピン人と思われる女性だ
とはいえないので国籍は与えられな
いと。日本の国籍法では日本で生ま
れた子供は、父親も母親も判らなけ
れば日本国籍が認められるのですが、
日本政府は、母親が件のフィリピン
人と思われる女性である可能性が高

く、母親が判らないとの事実の立証
はできていないという考えで日本国
籍を認めませんでした。そこで日本
国籍の確認を求める裁判となり、一
審は国籍を認めましたが控訴審では否定
されるという流れで最高裁に事件が
上がつてきて、私が担当調査官にな
りました。その時の主任裁判官は外
務省出身の中島敏次郎裁判官で、「細
かい解釈はあなたに任せるが、無国
籍を容易に認めるような判断だけは
絶対にしてはいけません。無国籍とな
ると、一旦海の上に漂流したときに、
究極的にはどの国も受け入れないと
いうこともあり得る、というものだ。
無国籍は絶対認めてはいけません。」
とそれは熱く語つてくださつて。そ
の時、渥美先生が言われた、どうい
う社会を作るのかよく考えなさいと
いう言葉が私の中で浮かび上がつて、
自分の中で一本筋が通つたような感
じがした事件だつたんです。

■もう一つはどんなお話でしょう
か。

それはちょうど裁判長になつた頃
の引き継ぎ事件で、劇症性の病気で
小学校低学年のお子さんを亡くした
お母さんが、病院の診断が遅れてこ
の子は死んだんだと主張する損害賠
償請求事件でした。既に証拠調べも
終わつて、判決前の和解を行つてい
るときに、その事件を引き継ぎまし
た。お子さんの主治医の診断が少し
遅れたということは認定できそうで
したが、病気の進行から考えると正
しく診断できていても救命は難しか
つたというところは鑑定もして動か
なくなつていて。しかしお母さんは
病院がこの子を殺したとすぐ攻撃
的で、これでは和解は無理だとい
う状況でした。私は、最後に一度お母
さんの話をゆっくりと聞いてみよう
と和解の席に入つたのですが、その
時、色々話していたお母さんが、主
治医から「この子はもう熱も下がつ
てきているから、甘やかさずにお昼
もちゃんと食べさせないと元気なん
か出ませんよ」と言われたので、意
識混沌の子供を起こして無理矢理お
昼を口に入れたけれど食べられなか
つたということを話し出し、「あの
子は私のことを何と酷い母親だと思
つたでしょう」と泣いてしまつたん
です。その時、このお母さんがこ
んなに攻撃的なのは、自分を責め
て、責めて、自分が悪いんじゃない
と誰かに転嫁しないといられないく
らい辛いんだとストーンと私にも分
かつたような気がして、「お母さん
辛かつたね。」と言つたのです。お

母さんは何か憑きものが落ちたよう
に「裁判長さんが分かってくれたか
らもう何でもいいです」と。最終的
には和解はできず、請求は棄却で判
決が確定しました。その時に、理解
できないぐらい攻撃的な人の中にも
救いを求めている部分があるに違
ない、この人をこの事件に駆り立
ているモノは何なのかを裁判官も知
つて、当事者の痛みとか心に刺さつ
たトゲを少しでも取り除いた解決を
していきたいなというような考えを
持つようにはなつた気がしました。
私はどちらかというところと決断力があつ
て理路整然とパツパツと事件処理
できるタイプだつたと思うんですが、
「結論さえ出せば良いんだ」ではな
いというように、自分の裁判のやり
方が変つていつたきつかけとなつた
事件でした。

■それではどのような社会を作りた
いと普段お考えでしょうか。

政治家のように理想を持つてとい
うことではなく、例えば、騙されて
名主義だからそれでいいじゃないか
という社会にしたいのか、騙して署
名させたのを見過ぎさない社会にし
たいのかという、どっちの社会を望
んでいるかを自分に問いかけてなが

この嘘を許したら、署名さえ取ったら何でもありの社会になってしまうという、そんな小さな一つ一つの事件を追っていく中、どういふ社会を作りたいかを常に考えていこうというつもりでしようか。

■お仕事を続けてこられた上で心がけていることは何でしょうか。

私は修習中に子供が一人生まれ、任官して2年目に二人目の子供が生まれたので、家庭と仕事との両立を常に考えてきたんだと思います。そんなに意識的にやっていた訳ではないのですが、ズルズルと仕事をしたり、仕事を家庭に持ち込んだりせずに、家庭の時間はできる限りそちらに注力するということが、自分の職業人としての姿勢を作ってきたと思います。若い頃は無尽蔵に時間が使える男性の同僚を見て、私にはこれだけしか時間が無いと焦ったりもしたけれど、与えられた時間の中で最大限のパフォーマンスをと思うと仕事の順位付けとか手順とかは良くなくて来るし、集中力は人より磨かれていったのかなあと。

一方で家庭の時間も限られているから、家事とか育児をパーフェクトにやろうと思ったら参っちゃう。ただ、「ここだけは」というところは

こだわろうかなと。子供が小学1年生と年中の頃に凄く忙しい部署にいた時、夕食の手抜きをしようとしてホテルの美味しい筈のレトルトのハンバーグを買って出したことがあるんです。ところが、子供達が「これはママのハンバーグじゃない、美味しくない」と言うわけですよ。そう言われるとちよつと嬉しくて、夕飯だけは何か手作りで行こうと。それで土日に一週間分の夕食の料理をして、冷凍して、あとはチンすれば食べられるようにとやっているうちに、趣味はと聞かれば料理ですと言うようになりました。こだわるところはこだわられるけれど、みんな完璧にやろうとは思わない、そういうワークライフバランスというのは知らず知らずのうちにやらざるを得なくなっていましたね。

■24時間職業人でいるという考え方と、メリハリつけて切り離せという考え方と二つあると思いますが、どのように思われますか。

家に帰ると仕事のことは全く考えないかという点、母にいわせると、同業の夫と夕飯の時によく法律論をやっていたらしいですよ。でも基本的には私は切り離し派で、限られた時間で最大のパフォーマンスという

のを意識して来たと思いますね。自分の中でどういう切り分けをしているのかを考えずに、のべつ幕なしにダラダラと仕事の時間を広げていってたら私生活を上手に保つことはできないと思いますね。

■男性中心社会の中で活躍されていますが、女性と男性ということ意識されたことはありますか。

あまり意識したことはありませんね。ただ、自分がここで失敗すると、続く人達が、やっぱり女性は駄目ねと言われるのではないかと、そういう恐怖はいつも持っていた気がしますね。後に続く人たちの道を潰さないようにということも考えていたと思います。

■若い世代にも何か頂ける言葉がありましたら。仕事を頑張っていくためのアドバイスなど。

自分の仕事を愛するということが、やはり面白く思っているのが何より大事なんじゃないですかね。どうせやらなきゃいけないことなら、それをやりたいことに変えちゃおうよというのは、仕事を楽しくしていく一つの方法でしょうか。

■名古屋にいられて感じられていることを教えてください。

名古屋は経済的に安定しているからか街に活気がありますよね。また、名古屋の人は名古屋が一番で東京や大阪より名古屋の方が良いと思ってる人が多い印象です。その分保守的だなあ、外に出て行って頑張ろうと思うことはないのかなあと、生れ育った土地が一番と思ってるのはとても幸せなことだと思えます。また名古屋高裁は管内に北陸三県を含みますが、自然も文化も食生活も全てにおいて魅力的なところですね。

■最後に学会名古屋支部活動へのご提言などお話しただけませんか。こちらに来て中大出身の弁護士の先生方から、お店情報なども含めていろいろな情報を頂いて、大学が同窓ということの人の繋がりが一つのツールになっていることはとても良いことだと思ってます。

